

わが国のいじめの長期的影響に関する研究動向と展望 —1980年から2016年までの学術論文・大学紀要論文における研究の動向と課題—

亀田 秀子* 会沢 信彦** 藤枝 静暁***

Trends in and Future Prospects for Research on the Long-term Effects of Bullying in Japan: Research Trends and Issues Cited in Papers and Journal Articles Published between 1980 and 2016

Hideko KAMEDA, Nobuhiko AIZAWA, Shizuaki FUJIEDA

要旨 わが国におけるいじめの長期的影響に関する研究動向を明らかにすることを目的とし、文献研究を行った。わが国の学術論文と大学紀要論文において、いじめが社会問題となった1980年から2016年までの約37年間を対象とした。その結果、いじめの長期的影響に関する質的研究は17本、量的研究は39本、合計56本が該当した。2000年前後で論文数を比較すると、2000年以前より、2000年以後の論文数は増加傾向にあるといえる。いじめの長期的影響に関する質的研究の特徴として、いじめ被害体験と精神障害・外傷後ストレス障害との関連に関する研究、いじめ被害体験の克服過程・回復過程に関する研究が多くみられた。また、いじめの長期的影響に関する量的研究の特徴として、いじめの被害体験と身体的・精神的・心理的影響との関連に関する研究、いじめ被害体験と自尊感情との関連に関する研究が多くみられた。

キーワード：いじめ被害体験 いじめの長期的影響 質的研究 量的研究 研究動向

問題と目的

わが国の学校におけるいじめ問題は、1980年代以降、社会問題になっている。そこで、1980年代からの30数年の間のいじめ研究の動向、いじめの長期的影響に関する研究に注目してみていくこととする。

いじめの長期的影響については、子どもの心の発達にきわめて重大な影響を及ぼすことや、いじめられた体験の影響は、いじめの事態が解消し、一定の時間を経過しても簡単に消失するものでは

なく、成人した後までも持続的な影響を及ぼすことが報告されている（坂西，1995；坂西・岡本，2004）。

いじめ被害体験と外傷後ストレス障害（PTSD）との関連に関する研究は、1990年代にみられた。立花（1990）によれば、いじめの場面がありありと目に浮かび、そのたびに不安と恐怖に悩まされるといふ再体験が認められるものがあり、いじめも外傷後ストレス障害（PTSD）を引き起こすストレスとなり得ると報告している。

また、光武（1997）の研究では、いじめが原因で登校を拒否した子どもに不眠、夜驚、悪夢、体の硬直など、外傷後ストレス障害（PTSD）の症状を示す者がいると報告している。その後のいじ

* かめだ ひでこ 十文学学園女子大学人間生活学部人間福祉学科
** あいざわ のぶひこ 文教大学教育学部心理教育課程
*** ふじえだ しずあき 埼玉学園大学人間学部心理学科

め被害体験と外傷後ストレス障害（PTSD）との関連に関する研究の動向について見てみたい。

いじめ被害の後遺症に関する研究では、不適応状態（抑うつ）は少なくとも7～10年ほど持続する可能性があるとして指摘する（Olweus, 1993）。いじめ被害者は、対人恐怖、不安、抑うつ、不適応行動がみられ、また、人間関係に用心深くなり、社会的退却傾向を身に付けるようになっていくという（立花, 1990；深谷, 2004）。

いじめの長期的影響の性差についての研究は、亀田・相良（2010）の研究があるが、いじめの否定的影響（情緒的不適応、同調傾向、孤立不安）は、女子の方が男子より有意に高いことを明らかにしている。女子はいじめられた体験を通して、再びいじめられないように同調する傾向にあることが報告されている。

しかし、過去のいじめ被害体験が及ぼす影響には否定的影響ばかりでなく、肯定的影響もあることが報告されている（坂西, 1995；香取, 1999；深谷, 2004）。肯定的影響としては、坂西（1995）によれば、「我慢強くなった」、「相手の気持ちをよく考えるようになった」等、また、香取（1999）は、「他者尊重」、「精神的強さ」等の肯定的影響が考えられると報告している。

いじめの長期的影響に関する量的研究は、坂西（1995）のいじめ被害に及ぼす長期的な影響に関する研究、香取（1999）の過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復に関する研究、そして、亀田・相良（2010）の過去のいじめ体験が青年期後期においても及ぼす長期的影響の研究ほか、多くの研究が蓄積されてきている。

いじめの長期的影響に関する質的研究の動向はどうか。わが国の学術論文・紀要論文におけるいじめ問題の近年の傾向を示した研究がある（亀田・会沢・藤枝, 2014, 2015）。亀田・会沢・藤枝（2014）は、2004年から2013年までの10年間における学術論文において、「いじめ」がタイトルに含まれている論文は27本あり、そのうち、「いじめの長期的影響」に関する質的研究は、

亀田・相良（2011）と細澤（2004）の2本であることを報告している。

また、亀田・会沢・藤枝（2015）は、2005年から2014までの10年間における紀要論文において、「いじめ」がタイトルに含まれている論文は141本あり、「いじめの長期的影響」に関する質的研究は、伊東（2009）と橋本（2012）の2本であることを報告している。

いじめが社会問題になった1980年代から現在までの「いじめの長期的影響」に関する質的研究・量的研究の動向を概観することにより、いじめの長期的影響のマイナス面やプラス面が浮き彫りになり、いじめの長期的影響に関する理解を深めることができるであろう。

本研究では、わが国の学術論文・紀要論文において、1980年代から2016年までの37年間を対象に「いじめの長期的影響」に関する質的研究・量的研究を抽出し、概観していくことを目的とする。

本研究では紙面の都合により、取り上げることができなかった研究もあることをご了承いただきたい。

方法

文献の抽出に際しては、国立国会図書館（NDL Search）と国立情報研究所（CiNii）を用いて、まず、「いじめ」を検索語として検索を行った。続いて、「いじめ+影響」、「いじめ+予後」、「いじめ+回復」、「いじめ+事例」、「いじめ+ケース」を検索語として検索し、1980年から2016年までのわが国の学術論文・紀要論文を抽出した。なお、抽出に際しては、大会発表・発表要旨、資料、シンポジウム等は対象から除外した。

「いじめの長期的影響」の期間について定義している論文は見当たらないが、本研究では、坂西（1995）が指摘している、「いじめを脱した短期間、例えば、半年や1年という時間の経過ではなく、多くの年数が経過した後のいじめの影響」と捉えることにする。

結果

1. いじめの長期的影響に関する37年間の論文数の推移

1980年から2016年までのいじめの長期的影響に関する論文数を質的研究と量的研究に分けて一覧表に示した (Table 1). 学術論文においては, いじめ研究に深く関連すると考える「教育心理学研究」, 「心理臨床学研究」, 「カウンセリング研究」, そして, 「その他の学術論文」の4つに分類した.

1980年から2016年までを10年スパンで区切り, 論文数をみていくことにする. 第Ⅰ期は, 1980年から1989年, 第Ⅱ期は, 1990年から1999年, 第Ⅲ期は, 2000年から2009年, 第Ⅳ期は, 2010年から2016年とした.

第Ⅰ期は, 質的研究はなく, 量的研究は1本, 計1本であった. 第Ⅱ期は, 質的研究は3本, 量的研究は7本, 計10本であった. 第Ⅲ期は, 質的研究は9本, 量的研究は9本, 計18本であった. 第Ⅳ期は, 質的研究は5本, 量的研究は22本, 計27本であった.

いじめの長期的影響に関する論文は, 質的研究17本, 量的研究39本, 合計56本が該当した. 第Ⅲ期の2000年から2009年は18本, そして, 第Ⅳ期の2010年から2016年は27本であった.

2000年前後で論文数を比較をするために, 直接確率計算を行った結果, その偶然確率は $p=0.80$ (片側検定) であり, 有意水準10%の傾向差があった. したがって, 2000年以前と比べると, 2000年以後の論文数は増加傾向にあると言える.

いじめられた体験については, 多くの用語が用いられている. 「いじめられ体験・経験」, 「過去のいじめられ体験・経験」, 「いじめ被害体験・経験」, 「いじめ被害者」, 「いじめ被害体験者」等, 散見された.

本研究においては, 研究の分類の際に使用する用語は, 便宜的に「いじめ被害体験」に用語を統一して論じていくことにする. 研究の分類以外については, それぞれの論文で使用されている用語を使うものとする.

2. いじめの長期的影響に関する質的研究の概要

質的研究を便宜的に, (1) いじめ被害体験の実態に関する研究, (2) いじめ被害体験と精神障害・外傷後ストレス障害 (PTSD) との関連に関する研究, (3) いじめ被害体験と人格発達との関連に関する研究, (4) いじめ被害体験の克服過程・回復過程に関する研究, (5) いじめ被害体験と自己成長感との関連に関する研究, (6) その他の研究に分類し, それぞれの概要を報告する. なお, いじめの長期的影響に関する質的研究の文献一覧をTable 2に示した.

(1) いじめ被害体験の実態に関する研究

会沢・平宮 (2008 a) は, 大学生269名を対象として, 「小学校1～3年時に体験した, いじめではないかと最も強く感じた出来事」を尋ねる自由記述式調査を行った. その結果, 小学校1～3年生で38.4%のいじめ経験があり, いじめの内容に関しては, 回避的行動によるいじめ, 強圧によるいじめ, 言葉によるいじめの順で多かったことが報告された.

会沢・平宮 (2008 b) は, 大学生269名を対象として, 「小学校4～6年時に体験した, いじめではないかと最も強く感じた出来事」を尋ねる自由記述式調査を行った. その結果, 小学校4～6年生では69.8%のいじめ経験があり, いじめの内容に関しては, 拒否的行動によるいじめ, 言葉によるいじめ, 強圧的行動によるいじめの順で多かったことが報告された.

会沢・平宮 (2009) は, 大学生268名を対象として, 「中学校1～3年時に体験した, いじめではないかと最も強く感じた出来事」を尋ねる自由記述式調査を行った. その結果, 中学校1～3年生に至っては75.0%がいじめ経験を有しており, いじめの内容に関しては, 拒否, 言語によるいじめ, 所有物を通してのいじめの順で多かったことが報告された.

三島・黒川・大西ら (2010) は, 大学1年生17名を対象に, 中学・高校生当時の体験を回想し, ネット上のトラブルや「いじめ」に関する出来事

Table 1 1980年から2016年までのいじめの長期的影響に関する論文数

発表年	質的研究					量的研究					合計
	紀要論文	教育心理学研究	心理臨床学研究	カウンセリング研究	その他の学術論文	紀要論文	教育心理学研究	心理臨床学研究	カウンセリング研究	その他の学術論文	
1 1980											
2 1981											
3 1982											
4 1983											
5 1984											
6 1985											
7 1986											
8 1987											
9 1988						1					1
10 1989											
11 1990					1						1
12 1991											
13 1992						1					1
14 1993						1					1
15 1994											
16 1995	1									1	2
17 1996											
18 1997											
19 1998	1					1					2
20 1999						2		1			3
21 2000											
22 2001	1										1
23 2002	1									1	2
24 2003										1	1
25 2004			1			1		1			3
26 2005										1	1
27 2006					1	1					2
28 2007	1					1					2
29 2008	2									1	3
30 2009	2					1					3
31 2010	1					3					4
32 2011	1			1		1					3
33 2012	1					2				1	4
34 2013						2				2	4
35 2014						4				2	6
36 2015						1	1			1	3
37 2016					1					2	3
合計	12		1	1	3	23	1	1	1	13	56

Table 2 いじめの長期的影響に関する質的研究の文献一覧

発刊年	著者	誌名分類	キーワード
1 1990	立花	その他の学術論文	いじめられ体験、発症した精神障害
2 1995	久留・餅原	紀要	外傷後ストレス障害、治療心理学的研究、極度のいじめ
3 1998	清水	紀要	いじめられ体験、人格発達に及ぼす阻害的影響、自己愛性格症例
4 2001	久保田	紀要	いじめ被害者、反応様式、いじめ解決
5 2002	三浦	紀要	いじめ過程モデルの検証、いじめ被害者の事例
6 2004	細澤	心理臨床学研究	いじめを契機、外傷後ストレス障害、力動的心理療法
7 2006	青木	その他の学術論文	女子、いじめ克服、プロセスモデル
8 2007	中島	紀要	女子大学生、いじめの体験、その影響
9 2008	会沢・平宮	紀要	大学生が経験、いじめ、小学校1～3年時の経験、質的分析
10 2008	会沢・平宮	紀要	大学生が経験、いじめ、小学校4～6年時の経験、質的分析
11 2009	伊東	紀要	いじめ、心身症状、思春期女子、心理治療過程
12 2009	会沢・平宮	紀要	大学生が経験、いじめ、中学校1～3年時の経験、質的分析
13 2010	三島ら	紀要	ネット上、トラブル、いじめ、中学・高校生当時、体験、回想
14 2011	亀田・相良	カウンセリング研究	過去のいじめられた体験、影響、自己成長感
15 2011	岩崎・海蔵寺	紀要	過去のいじめられ経験、回復過程、自己否定感
16 2012	橋本	紀要	リジリエンシー、いじめからの回復の語り
17 2016	片柳	その他の学術論文	いじめ、被害生徒、重篤な精神症状を呈する構造

についての内容で面接を行った。面接調査の中で問題となった事柄の多くが、親しい友人やクラスメートなど、既知の人間関係上の問題であり、被害者は、不安感や孤独感を感じたり、怒りを覚えたりすることが報告された。

(2) いじめ被害体験と精神障害・外傷後ストレス障害 (PTSD) との関連に関する研究

立花 (1990) は、思春期の精神科患者25名を対象に、症状の特徴から、幻覚妄想群、ひきこもり群、空想逃避群、身体症候群の4群に分けて考察した。思春期の精神科患者は、学校での「いじめられ体験」が発症の契機や症状の形成に強く影響していることが示唆された。

久留・餅原 (1995) は、男子生徒のほぼ2年間の心理療法を実施した症例を扱っている。男子生徒は、高校入学と同時に極度のいじめを受けPTSDの症状を呈した。嘔吐、睡眠障害、うつ状態が続き、再体験等から二次的な心気症状が出現した。さらに、不登校状態が続き、高校退学に至り、部屋に閉じこもるという症例である。心理療法を受けるなかで、自律訓練を習得することに

より、さまざまな身体化現象は消失し、生きることへの自信を持つことができるようになったことが報告された。

細澤 (2004) は、21歳の女子学生の臨床例を呈示している。女子学生は、小学校高学年から中学校にかけて慢性のいじめを経験した。PTSD症状、フラッシュバックなどの再体験を主訴としている。精神病理、および心理療法過程に関して力動的観点から検討を行った。その結果、外傷体験を生活のなかに統合することが可能になったことが報告された。

伊東 (2009) は、中学で再度いじめを受け、心身症状や自傷行為を発症したケースに対して心理治療を行った症例を呈示している。小学校6年の時にいじめを体験し、人間関係で不信感を抱いた児童が、学校との連携のもとで改善に向かったことが報告された。

片柳 (2016) は、中学3年生の女子生徒の事例を呈示している。クラスメートからのいじめを受け、抜毛症、解離性障害、大うつ病性障害の診断を受けた事例である。病院の面接において、心身

の安定を図ることや支持的精神療法を実施した。高校は休まず登校していたが、友だちからいじめの相談を受けるといじめの出来事を想起し、未だに、過呼吸を起こすことがあることが報告された。

(3) いじめ被害体験と人格発達との関連に関する研究

清水(1998)は、中学時代に「いじめられ体験」を持つ自己愛性格の男子大学生1名を対象に、心理治療過程を報告している。いじめられ体験が以後の人格発達に阻害的な影響を及ぼし、後に対人恐怖症状を呈するに至ったことが明らかにされた。

(4) いじめ被害体験の克服過程・回復過程に関する研究

三浦(2002)は、中学2年生の時にいじめに遭った女子の事例を呈示している。いじめ過程の6段階と諸要因の関連を検討している。家族が子どもの状況を見極め、適切な援助者を見つけ、さらに直接加害者に働きかけたことがいじめの解決につながったと報告している。

青木(2006)は、中学生時代にいじめを経験した18歳から25歳の女性15人に半構造化インタビューを実施し、いじめ被害の長期的影響の回復プロセスを探索的に検討した。その結果、回復のきっかけは、容姿の改善、知識の獲得、他者による自己開示の受容、良質のソーシャル・サポート、他者からの好評価、他者モデルの存在、適応しやすいコミュニティの発見の7つの出来事が見出されたことが報告された。

中島(2007)は、女子大学生153名を対象として、いじめ体験とその影響について検討するために自由記述式の調査を実施した。その結果、いじめ被害体験の影響は、現在の自己像や、対人関係の持ち方にnegativeにもpositiveにも影響を及ぼしていることが示唆された。過去のいじめ体験から、「自己成長・対人関係における柔軟さ」という自分のpositiveな側面を記述できることは、いじめを乗り越えるということに結びつくと言及している。

ている。

岩崎・海蔵寺(2011)の研究は、23歳男性が職場で不適応状態に陥った事例である。男性は、小・中学校でいじめを受けてきた。いじめられ経験からの回復過程とその支援について検討した。第1及び第2期では人間関係の不安定さが目立ち、いじめられ経験の影響がうかがえ、第3期は親との絆の実感が他者とのつながりにおける基礎を固めている。第4期で自己受容を遂げ、他者への不信感や自身の被害感など否定的認知が改善し、職場で安定した人間関係を築くに至っている。回復過程は“他者とのつながり”を取り戻す過程であることが報告された。

橋本(2012)は、いじめの当事者を強いストレスによる影響から回復できる心的特性である「レジリエンシー」を有している存在として捉えている。面接協力者5名の語られた内容を精査し、当事者のレジリエンシーという側面に焦点を当てながら再構成を試みている。その結果、協力者それぞれ当時のレジリエンシー、影響を与えていた事柄、回復過程において生じた事柄を見出している。いじめ体験におけるレジリエンシーとして、「状況を捉えること」、「信念を持っていること」、「自らの行動で貫けること」があげられたことが報告された。

(5) いじめ被害体験と自己成長感との関連に関する研究

亀田・相良(2011)は、過去にいじめられた体験を持つ大学生等、17名を対象に半構造化面接を実施した。自己成長感をもたらす要因として、学校・家庭での話しやすい関係の構築と自己開示があったこと、いじめられた辛さをわかってくれる人の存在、信頼における大人の存在、家族関係と友人関係の良好さ、ソーシャル・サポートが得られたこと、積極的な対処法を取ったことが示唆された。

(6) その他の研究

いじめ被害体験と反応様式についての研究(久保田, 2001)がある。

3. いじめの長期的影響に関する量的研究の概要

量的研究を便宜的に、(1) いじめ被害体験と身体的・精神的・心理的影響との関連に関する研究、(2) いじめ被害体験と心的外傷・社交不安障害との関連に関する研究、(3) いじめ被害体験と適応感・自我同一性等との関連に関する研究、(4) いじめ被害体験と自己成長感との関連に関する研究、(5) いじめ被害体験とレジリエンスとの関連に関する研究、(6) いじめ被害体験と自尊感情との関連に関する研究、(7) いじめ被害体験と対人関係・友人関係・役割取得との関連に関する研究、(8) その他の研究に分類し、それぞれの概要を報告する。なお、いじめの長期的影響に関する量的研究の文献一覧をTable 3に示した。

(1) いじめ被害体験と身体的・精神的・心理的影響との関連に関する研究

奥村・川口・河原・長井(1988)は、大学生220名を対象に、大学生の過去の「いじめられ体験」に関する調査を行った。その結果、いじめの現象は、小学校、中学校という一時期だけの問題に終わる体験ではなく、大学生の年齢になっても、心の傷として影響を及ぼす重大な問題であると指摘する。

坂西(1995)は、いじめが被害者に及ぼす長期的な影響について、大学生3,915名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、初期の学校生活において体験したいじめは、成人した後までも身体的・精神的に持続的な影響を及ぼすこと、さらに、いじめられた体験が否定的な影響ばかりを与えているわけではないことも報告している。

小熊・四ノ宮・生村(1998)は、国立身体障害者リハビリテーションセンターに入所している30歳未満の者107名を対象として、過去のいじめ・いじめられ体験と予後との関連について検討した。その結果、被害体験の内容、被害体験時の対処、その後の変化、現在の心境によって影響することが示唆された。過去のいじめ被害体験が心理的予後に影響を及ぼしていると報告し、潜在的に

予後の悪い事例がある可能性も示唆された。

香取(1999)は、大学生・短大生806名を対象として、過去のいじめ体験がその後どのように影響しているかについて質問紙調査を行った。その結果、いじめの影響には、情緒的不適応、同調傾向等のマイナスの影響と他者尊重、精神的強さ等のプラスの影響があることが示唆された。

石橋・若林・内藤・鹿野(1999)は、大学生484名を対象に、大学生の過去のいじめ被害経験とその後遺症について質問紙調査により検討した。その結果、いじめを受けたことのある大学生は、心理的・身体的な影響を受けており、さらに、対人恐怖性が高いことが明らかになったことが明らかにされた。しかも、その影響はいじめを受けた当時の苦痛が大きくなるにつれ、長期的な影響も強くなっている。いじめられたことの長期的影響として、「我慢強くなった」と回答する者は、対人恐怖性も高くはないということも示唆された。

藤・遠藤(2014)は、ネットいじめ被害経験のある217名を対象にウェブ調査を実施し、被害時における遮断的対処、ネットいじめ被害に関する思考の反すう、ネガティブ感情、長期的な影響としての対人的消極性について検討した。共分散構造分析の結果、被害時における遮断的行動は、ネットいじめ被害者における否定的影響の長期化をもたらし要因となっていることが示唆された。

高岸・岩田(2016)は、大学生383名を対象に、小中高校時代のいじめ体験が、大学生生活に及ぼす影響を質問紙調査により検討した。その結果、いじめ体験がある者は、いじめ体験のない者に比べて、情緒的不安定、同調傾向、脅威・嫌悪予測が有意に高いことが示唆された。

森本(2004)は、大学生131名を対象として過去のいじめ体験における対処法といじめ体験の心的影響の関連を検討した。その結果、いじめへの対処法のなかでも積極的自力克服対処後はその後のプラスの影響を予測し、無抵抗・従順対処はマイナスの影響を予測することが明らかになった。

Table 3 いじめの長期的影響に関する量的研究の文献一覧

発刊年	著者	誌名分類	キーワード
1	1988 奥村ら	紀要	大学生、過去のいじめられ体験
2	1992 豊嶋・石永・遠山	紀要	いじめへの対処、大学生期の適応、自我同一性
3	1993 豊嶋・順毛	紀要	いじめへの対処、大学生期の適応、自我同一性
4	1995 坂西	その他の学術論文	いじめ、被害者、長期的な影響、自己認知
5	1998 小熊・四ノ宮	紀要	入所者、学校生活等、過去のいじめ・いじめられ体験、予後
6	1999 石橋ら	紀要	大学生、過去のいじめ被害経験、後遺症、対人恐怖心性
7	1999 森下	紀要	学校ストレス、いじめの影響、ソーシャル・サポート
8	1999 香取	カウンセリング研究	過去のいじめ体験、心的影響、心の傷の回復方法
9	2002 荒木	その他の学術論文	いじめ被害体験、長期的影響、レジリエンシー
10	2003 榎戸・平口・窪田	その他の学術論文	回復過程、いじめ被害、身体内省の関与
11	2004 三宅	紀要	いじめの被害者経験、自己開示、成人期の愛着
12	2004 笠井・三屋	紀要	いじめ経験、対人関係、及ぼす影響
13	2004 森本	心理臨床学研究	過去のいじめ体験、対処法、心的影響
14	2005 荒木	その他の学術論文	いじめ被害体験者、青年期後期、レジリエンス
15	2006 中村・相模	紀要	被虐待経験、いじめを受けた経験、青年期後期、自己肯定意識
16	2007 佐藤・盛合	紀要	いじめ体験、忘却、心的外傷
17	2008 三島	その他の学術論文	小学校高学年、親しい友人、いじめの長期的な影響、高校生
18	2009 横山・内田	紀要	過去のいじめ体験、レジリエンス、自動思考、対処行動
19	2010 亀田・相良	紀要	過去のいじめ体験、青年期後期、長期的影響、自己成長感
20	2010 野中・永田	紀要	過去のいじめ体験、青年期、影響、体験の時期、発達に関連
21	2010 西田	紀要	思春期、青年期、いじめに影響、家庭関連要因
22	2011 米満・森川・窪田	紀要	いじめ場面、第三者の行動、援助規範意識、行動の動機の影響
23	2012 水野	紀要	いじめ場面、目撃者の役割取得、共感、いじめ関連行動
24	2012 山口・長野	紀要	過去のいじめられた体験、青年期の友人関係、及ぼす影響
25	2012 菱田・川畑・宋	その他の学術論文	いじめの影響、レジリエンシー、ソーシャル・サポート
26	2013 藤田・樋町	紀要	大学生、社交不安障害傾向、いじめられ経験、QOL
27	2013 宮田	その他の学術論文	被災後、いじめ体験、効力感回復
28	2013 吉川・今野・会沢	紀要	いじめの被害 - 加害経験、自尊感情、大学生、遡及的調査
29	2013 藤野・長沼	その他の学術論文	いじめ場面、第三者、状況要因、個人要因、及ぼす影響
30	2014 廣・村松・服部	紀要	高校生、レジリエンス、性別、いじめを受けた経験、生活習慣
31	2014 吉川・今野・会沢	紀要	大学生、過去のいじめ経験、いじめの捉え方、自尊感情
32	2014 今野・吉川・会沢	紀要	仮想的有能感、自尊感情、いじめ、関係、大学生、中学時代
33	2014 遊間	その他の学術論文	大学生、いじめの加害・被害行為、継続性と流動性
34	2014 菱田・川畑・李	その他の学術論文	思春期前期、いじめ被害経験、心理社会的変数
35	2015 小早川・杉村・石田	紀要	いじめられた体験、自己成長感、他者からの支援
36	2015 水谷・雨宮	教育心理学研究	小中高時代、いじめ経験、大学生の自尊感情、Well-Being
37	2015 丸岡ら	その他の学術論文	過去のいじめ、経験、大学生に与える影響
38	2016 高岸・岩田	その他の学術論文	小・中・高校時代、いじめ体験、大学生生活、及ぼす影響
39	2016 藤・遠藤	その他の学術論文	ネットいじめ、被害時、遮断的対処、短期的および長期的影響

いじめに対する対処法によって、その後の影響が異なることが示唆された。

(2) いじめ被害体験と心的外傷・社交不安障害との関連に関する研究

佐藤・盛合(2007)は、高校生を対象として、いじめ体験における忘却について、質問紙調査を実施した。中学時代のいじめ被害体験が、どのようなものがどの程度忘却され、逆に心的外傷として残るかについて検討している。その結果、匿名性の高い心理的いじめに関して、特に男子生徒は忘却されがたいということが明らかにされた。また、再び同じようないじめが再燃することにより、過去の体験も蘇ることも示唆された。

藤田・樋町(2013)は、大学生100名を対象として、大学生の社交不安障害(SAD)傾向といじめられ経験・QOLについて、質問紙調査を行った。その結果、過去のいじめられた経験のある者において、パフォーマンス場面・社交場面において不安・恐怖を高く感じている者は、他者から評価されることを否定的に解釈する認知傾向が高く、将来に対する自信は有意に低いことが示唆された。

(3) いじめ被害体験と適応感・自我同一性等との関連に関する研究

豊嶋・石永・遠山(1992)は、いじめへの対処と大学生期の適応について検討した。その結果、被害体験が「嫌な思い出」であり続けたり、「くやしい・許せない」と意味付けたりする、といったこだわりは、特に「嫌な思い出」において、現在及び将来の自己投入の構えを抑制し、自我同一性地位を低下させることが示唆された。

豊嶋・順毛(1993)もまた、いじめへの対処と大学生期の適応について検討した。その結果、被害体験に対する外傷的なこだわりの強さが不良な交友適応感に結びつくことが示唆された。また、良好な学業適応感は、一方では被害体験へのこだわり・知性化による防衛がもたらされることが示唆された。

中村・相模(2006)は、大学生1,246名を対象

として、被虐待経験、いじめを受けた経験が青年期後期の自己肯定意識に及ぼす影響を検討するため、質問紙調査を行った。その結果、心理的いじめを受けた経験が自己肯定意識に影響がみられ、身体的いじめと心理的いじめでは、自己肯定意識に対する影響が異なることが示唆された。また、いじめられ経験の期間は、對他者領域に関して、いじめの期間が長いほど他者への信頼にマイナスの影響があることが示唆された。

(4) いじめ被害体験と自己成長感との関連に関する研究

亀田・相良(2010)は、大学生等1,039名を対象として、過去のいじめ体験が青年期後期において及ぼす長期的影響と、いじめられた体験を通しての自己成長感を分かつ要因について検討した。その結果、自己成長感に関連する要因として、いじめられた体験の自己開示をすることや、抑うつ性の低さが関連していることが示唆された。

小早川・杉村・石田(2015)は、大学生102名を対象として、過去のいじめられた体験を通じた自己成長感を促す他者からの支援について、ウェブ調査を行った。その結果、いじめ被害者は、周囲の人がいじめに関して積極的に関わってくれている、いじめ被害者のために行動してくれると感じることで、他者は信頼できる、自己を受け入れてもらえると感じていることが示唆された。

(5) いじめ被害体験とレジリエンスとの関連に関する研究

荒木(2005)は、大学生等301名を対象として、いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンス¹⁾に寄与する要因の検討を質問紙調査により行った。その結果、いじめ被害体験者は青年期後期において特に对人的ストレスイベントを多く体験しているわけではないにもかかわらず、非体験者よりも適応状態が悪い傾向がみられた。この傾向は男性の方が強く、いじめ被害開始時期は無関係であることが示唆された。

横山・内田(2009)は、大学生を対象として、過去のいじめ体験の有無が現在のレジリエンス・

自動思考・対処行動の認知行動特性に及ぼす影響過程について検討した。その結果、いじめ経験者は未経験者よりもレジリエンスの「I can」、自動思考の「自己に対する非難」、対処行動の「情報収集」、「計画立案」が有意に高いことが示された。

(6) いじめ被害体験と自尊感情との関連に関する研究

野中・永田(2010)は、大学生等396名を対象として、いじめ体験の時期とその後の影響との関係、さらに、現在の自尊感情と友人関係にどのような影響を及ぼしているか、発達の観点から検討した。その結果、小学校以前・小学校時期のいじめ体験の影響“同調傾向”は、その後の自尊感情に影響を及ぼすことが明らかにされた。同調傾向が増せば増すほど他者に同調しようとするにより、自尊感情も高くなることが示唆された。中学校時期のいじめ体験の影響“他者評価への過敏”は、その後の友人関係に影響を及ぼすことが明らかにされた。他者への評価が過敏になればなるほど、友人関係は深まることが示唆された。

吉川・今野・会沢(2013)は、大学生349名を対象として、いじめの被害-加害経験と自尊感情との関係について質問紙調査を行った。その結果、いじめと自尊感情の関係については、被害経験者は、被害の経験がない者と比較して、自尊感情が有意に低かった。いじめの態様との関係については、言語的・身体的な暴力被害を経験した者の自尊感情は、これらの被害経験のない者よりも有意に低いことが示唆された。また、いじめの時期との関係では、小学校中高学年から高校にかけて、いじめ被害を経験した者は、経験しなかった者よりも自尊感情が有意に低かったことが示唆された。

吉川・今野・会沢(2014)は、大学1年生362名を対象として、大学生における過去のいじめ経験といじめの捉え方、および自尊感情との関係について、質問紙調査を行った。その結果、いじめを仕方ないことであると受け止め、いじめとふざ

けの区別が困難であると述べた者の自尊感情は低いことが示唆された。

水谷・雨宮(2015)は、大学生208名を対象として、小中高時代のいじめ経験が大学生の自尊感情とWell-Beingに与える影響について、質問紙調査を行った。水谷・雨宮(2015)は、幸福感やこれと関連する特感情感をWell-beingとして位置づけている。その結果、いじめ経験の頻度は高等学校よりも小中学校で高かった。中学校や高等学校の頃のいじめ被害経験が大学生のWell-Beingに影響を及ぼしていることが明らかにされた。また、いじめ被害経験がWell-Beingに直接的にも、自尊感情を介して間接的にも影響を与えていることを見出した。いじめ被害経験が長期的に心的状態に影響を及ぼすことを支持するものであることが示唆された。

(7) いじめ被害体験と対人関係・友人関係・役割取得との関連に関する研究

笠井・三屋(2004)は、大学生447名を対象として、いじめ経験が対人関係のあり方に及ぼす影響について質問紙によって調査を行った。その結果、いじめ経験の影響には「友人を大切にしようと思うようになった」等、他者尊重・自己配慮という関係・愛着性と自主・独立性というプラスの方向への変化と、他者への過敏、同調傾向という過敏・回避あるいは迎合というマイナスの方向への変化があったことが報告された。

山口・長野(2012)は、大学1年生337名を対象として、過去のいじめられた体験が青年期の友人関係に及ぼす影響について、質問紙調査により検討した。「被害者」は、「被害者かつ加害者」と「無関係」よりも傷つけられることを回避し、「被害者」は、「被害者かつ加害者」よりも傷つけることを回避する傾向があるということが示唆された。被害者においては、いじめ体験が何らかの形で、その後の友人関係に影響していることが示唆された。

水野(2012)は、大学生562名を対象として、いじめ場面における目撃者の役割取得と共感がそ

の後の関連行動に及ぼす影響について質問紙調査を行った。その結果、「いじめの現場を目撃した後は、いじめに加担したり、加害者に同調したりするような行動が生起しない」、また「被害者に対する役割取得は、被害者援助行動を促進し、傍観行動を抑制する」ことが示唆された。

(8) その他の研究

「学校ストレス」と「いじめ」の影響に対するソーシャル・サポートの効果に関する研究（森下, 1999）、いじめの被害者経験と、その自己開示と成人期の愛着との関係に関する研究（三宅, 2004）等がある。

考察と今後の課題

以上の結果を踏まえて、37年間のいじめの長期的影響に関する動向について特徴的な点を明らかにし、今後の課題について述べたい。

第1に、いじめ被害体験における長期的影響としての精神障害・外傷後ストレス障害の研究が比較的多くみられた。最初に出されたのは立花（1990）の研究であり、続いて、久留・餅原（1995）、さらに、石橋・若林・内藤ら（1999）と続く。1990年代にいじめ被害体験による重篤なケースを扱っている研究が報告されている。2000年代では、細澤（2004）、佐藤・盛合（2007）の研究がみられる。1990年から2007年までに、いじめ被害体験の影響による精神障害・PTSDへ至った研究の流れがあったことが、見て取れる。

立花（1990）は、学校での「いじめられ体験」が精神障害発症の契機や症状の形成に強く影響していることを示唆している。このことは重要な問題提起となっていることを見逃してはならない。

その後の研究においては、極度のいじめを受け外傷後ストレス障害（PTSD）症状を呈する症例（久留・餅原, 1995）、いじめ被害体験の長期的影響により外傷後ストレス障害（PTSD）症状やいじめ場面の外傷夢、フラッシュバックなどの再体験の症例（細澤, 2004）、クラスメートからのいじめを受けたことで解離性障害、大うつ病障害の

診断を受けた症例（片柳, 2016）において、心理療法・精神療法を受けることで症状等の緩和を目指している。いじめ被害体験の長期的影響の重篤さがうかがえる。また、佐藤・盛合（2007）は、再び同じようないじめが再燃することにより、過去の体験もフラッシュバックするという影響も重大であることを示唆している。

これらの知見からも、いじめ被害体験からどのように心の傷を回復していくかは重要な課題である。亀田・会沢・藤枝（2016）は、いじめ被害からの回復のプロセスを検討している。回復のプロセスの第1段階は、いじめられた体験から「安全を確保」する段階であり、第2段階は、「心の整理」の段階である。自己開示により、ソーシャル・サポートを得たり、重要な他者の存在に気づいたりする段階といえる。第3段階は「信頼感の回復」と「体験の肯定的意味づけ」の段階であることを示唆している。面接やカウンセリングを通して、丁寧に長い時間をかけながら、心の傷が回復していくことが望まれる。

今後の課題として、外傷後ストレス障害（PTSD）症状や精神障害へ至る症例のように重篤化することを理解しつつ、心の傷の回復方法の研究が待たれるところである。

第2に、いじめ被害体験における長期的影響としての人格発達等への影響の研究もいくつか見られた。いずれの研究も1990年代の研究であることが特徴である。

質的研究では清水（1998）の研究があるが、中学校でのいじめ被害体験により、人格発達に阻害的影響を及ぼし、後に対人恐怖症状を呈していることが明らかになった。

量的研究では、豊嶋・石永・遠山（1992）の研究がある。いじめ被害体験が「嫌な思い出」であり続けるという「こだわり」が、自我同一性地位を低下させることが示唆された。また、被害者に対する外傷的な「こだわりの強さ」が、不良な交友適応感に結びつくことを明らかにしている（豊嶋・順毛, 1993）。

今後の課題としては、これらの知見を生かし、いじめ被害体験に対して、段階を経ながら、最終的に「体験の肯定的意味づけ」への転換が重要であると考えられる。宅（2010）は、「ストレス体験に対する意味の付与」を見出している。ストレス体験に対する意味の付与とは、漠然とそのことを考えたり、ストレス体験を糧にするために心の中を探索したりといった心の動きを指しているものであるという。ストレス体験に対する意味の付与には、「ポジティブな側面への焦点づけ」、「出来事を経験した自己に対する評価」、「出来事の持つメッセージ性のキャッチ」の3つがある。いじめ体験に対しても、こうした意味づけが後の成長につながることもあろう。

第3に、いじめ被害体験における自尊感情との関連の研究は、4本が該当した。いずれも、量的研究であり、2010年、2013年、2014年、2015年と近年の研究であることが特徴である。

野中・永田（2010）は、小学校以前・小学校時期のいじめ体験の影響としての“同調傾向”が増せば増すほど他者に同調しようとすることにより、自尊感情も高くなることを示唆した。また、いじめ被害体験の“他者評価への過敏”が過敏になればなるほど、友人関係は深まることが示唆された。いじめ被害体験のマイナスの影響として捉えやすい“同調傾向”や“他者評価への過敏”は、自尊感情を高めたり、友人関係を深めたり、プラスの影響を及ぼすことが示唆され、新たな捉え方として大きな意義を見出せるものであろう。

吉川・今野・会沢（2013）は、いじめの被害経験者は被害経験のない者より、自尊感情が有意に低いこと、また、小・中から高校にかけてのいじめ被害経験者も被害経験のない者より、自尊感情が有意に低いことを明らかにした。

さらに、吉川・今野・会沢（2014）は、「いじめは仕方ないことである」、「いじめとふざけの区別は困難である」と捉えている者は、自尊感情が低いことを示唆した。いじめをどう捉えるかで、自尊感情への影響も違ってくるという研究結果

は、意義あることであると言える。

水谷・雨宮（2015）は、中学校でのいじめ被害経験が大学生のWell-Beingに影響を及ぼしていること明らかにしている。さらに、いじめ被害経験がWell-Beingに直接的にも、自尊感情を介して間接的に影響を与えていることを見出している。いじめ被害経験は長期的に心的状態に影響を及ぼすことが明らかになったといえる。

今後の課題として、いじめ被害体験により、自尊感情が低下した被害者に対する精神面でのケアや自尊感情をどうしたら高められるのか等の研究が求められると考える。

第4に、いじめ被害体験と自己成長感との関連に関する研究やいじめ被害体験からの克服・回復過程に関する研究もみられた。2006年から2015年までの研究であり、近年にみられる研究である。

いじめ被害体験と自己成長感との関連に関する研究では、質的研究において、亀田・相良（2011）は、自己成長感をもたらす要因について、自己開示の重要性、信頼における大人の存在、家族・友人関係の良好さ等をあげている。量的研究において、小早川・杉村・石田（2015）は、いじめ被害者は、いじめに関わってくれている人の存在の重要性が示唆された。

いじめ被害体験からの克服・回復過程に関する研究は質的研究にみられた。青木（2006）は、いじめ被害の長期的影響の回復プロセスを探索的に検討しており、容姿の改善や知識の獲得、良質なソーシャル・サポートを得て他者からの好評価等7つの出来事が見出されたことが報告された。

岩崎・海蔵寺（2011）は、他者とのつながりを取り戻す過程の重要性を示唆している。親との絆の実感が他者とのつながりの基礎を固めているとし、自己受容から他者への否定的認知の改善が重要であると指摘している。

これらの知見のキーワードは、「信頼における大人の存在」、「いじめに関わってくれている人の存在」、「良質なソーシャル・サポート」、「他者とのつながりを取り戻す過程」であり、いじめを理

解し、関わってくれる、信頼できる人の存在を得ることで、改めて、他者とのつながりを取り戻していくという過程の重要性が示唆されたのではないだろうか。

希薄になった人間関係を見つめ直し、他者とのつながりを取り戻す過程を大切にしていく教育が求められていると考える。

今後の課題では、これらの知見を教育現場に取り入れることができるプログラムの開発等も必要であると考えられる。いじめの長期的影響に関する研究から示唆された様々な結果を教師・教育関係者・研究者が教育現場に還元していく努力が求められよう。

【註】

1) レジリエンスに関して論文によっていくつかの表現があるが、本文中では「レジリエンス」と統一する。

引用文献

- 会沢信彦・平宮正志 (2008 a). 大学生が経験したいじめの質的分析 (1) —小学校1～3年時の経験— 生活科学研究 (文教大学生活科学研究), **30**, 197–205.
- 会沢信彦・平宮正志 (2008 b). 大学生が経験したいじめの質的分析 (2) —小学校4～6年時の経験— 文教大学教育学部紀要, **42**, 11–18.
- 会沢信彦・平宮正志 (2009). 大学生が経験したいじめの質的分析 (3) —中学校1～3年時の経験— 文教大学教育学部紀要, **43**, 5–12.
- 青木瑛佳 (2006). 女子におけるいじめ克服プロセスモデルの生成 現代の社会病理, **21**, 87–102.
- 荒木 剛 (2005). いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンス (resilience) に寄与する要因について パーソナリティ研究, **14**, 54–68.
- 坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期

- 的な影響および被害者の自己認知と他の被害認知の差 社会心理学研究, **11**, 105–115.
- 坂西友秀・岡本祐子 (2004). いじめ・いじめられる青少年の心 北大路書房
- 深谷和子 (2004). いじめ被害者に残る後遺症 青少年問題, **51**, 10–15.
- 藤 桂・遠藤寛子 (2016). ネットいじめ被害時における遮断的対処がもたらす短期的および長期的な影響 メディア・情報・コミュニケーション研究, **1**, 43–57.
- 藤田彩香・樋町美華 (2013). 大学生の社交不安障害 (SAD) 傾向といじめられ経験・QOLについての検討 福山大学こころの健康相談室紀要, **7**, 123–129.
- 橋本 綾 (2012). リジリエンスに関する一考察 —いじめからの回復の語り— 山梨英和大学心理臨床センター紀要, **8**, 30–37.
- 久留一郎・餅原尚子 (1995). ストレス障害 (PTSD) に関する治療心理学的研究 —極度のいじめの事例を通して— 鹿児島大学教育学部研究紀要, **47**, 121–141.
- 細澤 仁 (2004). いじめを契機とする外傷後ストレス障害の力動的な心理療法 心理臨床学研究, **22**, 240–249.
- 石橋佐枝子・若林慎一郎・内藤徹・鹿野輝三 (1999). 大学生の過去のいじめ被害経験とその後遺症の研究 —対人恐怖心性との関わり— 金城学院大学研究所紀要, **3**, 11–19.
- 伊東真里 (2009). いじめから心身症状を呈した思春期女子の心理治療過程 吉備国際大学紀要, **19**, 59–66.
- 岩崎久志・海蔵寺陽子 (2011). 過去のいじめられ経験からの回復過程について —自己否定感のあるクライアントの事例を通して— 流通科学大学論集, **24**, 29–39.
- 亀田秀子・会沢信彦・藤枝静暁 (2014). いじめ被害からの回復とその要因に関する基礎的研究 (1) —いじめを扱った学術論文の研究方法による分類— 文教大学教育研究所紀要, **23**, 57

-64.

亀田秀子・会沢信彦・藤枝静暁 (2015). いじめ被害からの回復とその要因に関する基礎的研究 (2) —いじめを扱ったわが国の大学紀要論文の研究方法による分類— 文教大学教育研究所紀要, **24**, 67-76.

亀田秀子・会沢信彦・藤枝静暁 (2016). いじめ被害からの回復とその要因に関する質的研究 —いじめを扱った学術論文・大学紀要論文における質的分析による検討— 文教大学教育研究所紀要, **25**, 103-112.

亀田秀子・相良順子 (2010). 過去のいじめ体験が青年期後期においても及ぼす長期的影響—自己成長感を分かちつて要因の検討— 聖徳大学児童学研究所紀要, **12**, 13-20.

亀田秀子・相良順子 (2011). 過去のいじめられた体験の影響と自己成長感をもたらす要因の検討 —いじめられた体験から自己成長感に至るプロセスの検討— カウンセリング研究, **44**, 277-267.

笠井達夫・三屋喜子 (2004). いじめ経験が対人関係のあり方に及ぼす影響 徳島文理大学研究紀要, **67**, 35-48.

片柳章子 (2016). いじめや体罰が被害生徒に重篤な精神症状を呈する構造について ストレスマネジメント研究, **12**, 97-104.

香取早苗 (1999). 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 カウンセリング研究, **3**, 1-13.

小早川茄捺・杉村和美・石田弓 (2015). いじめられた体験を通じた自己成長感を促す他者からの支援 広島大学心理学研究, **15**, 147-162.

久保田真功 (2001). いじめ被害者の反応様式—いじめ解決に至った事例の分析— 教育学研究紀要 (中国四国教育学会), **47**, 232-237.

三島浩路・黒川雅幸・大西彩子・本庄勝・吉武久美・長谷川輝之・長谷川亨・吉田俊和 (2010). ネット上のトラブルや「いじめ」に関する報告—中学・高校生当時の体験を回想して— 名古屋

屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, **57**, 61-69.

光武充雄 (1997). いじめによる不安障害を乗り越えて —PTSDからの理解と支援— 日本カウンセリング学会第30回大会発表論文集, 194-195.

三浦恭子 (2002). いじめ過程モデルの検証 —いじめ被害者の事例を通じて— 奈良女子大学社会学論集, **9**, 19-39.

水野正幸 (2012). いじめ場面における目撃者の役割取得と共感とその後のいじめ関連行動に及ぼす影響 創価大学大学院紀要, **34**, 293-318.

三宅邦建 (2004). いじめの被害者経験と、その自己開示と成人期の愛着との関係 九州保健福祉大学研究紀要, **5**, 1-10.

水谷聡秀・雨宮俊彦 (2015). 小中高時代のいじめ経験が大学生の自尊感情とWell-Beingに与える影響 教育心理学研究, **63**, 102-110.

森本幸子 (2004). 過去のいじめ体験における対処法と心的影響に関する研究 心理臨床学研究, **22**, 441-446.

森下正康 (1999). 「学校ストレス」と「いじめ」の影響に対するソーシャル・サポートの効用 和歌山大学教育学部紀要, **49**, 27-51.

中島千加子 (2007). 女子大学生のいじめの体験とその影響 洗足論叢, **36**, 83-94.

中村真実・相模健人 (2006). 被虐待経験、いじめを受けた経験が青年期後期の自己肯定意識に及ぼす影響に関する研究 愛媛大学教育実践総合センター紀要, **24**, 123-136.

野中公子・永田俊明 (2010). 過去のいじめ体験が青年期に及ぼす影響：体験の時期と発達の関連 九州看護福祉大学紀要, **12**, 115-124.

小熊順子・四ノ宮美恵子・生村浩史 (1998). 当センター入所者の学校生活等に関する調査から—過去のいじめ・いじめられ体験と予後との関連について— 国立身体障害者リハビリテーションセンター研究紀要, **19**, 47-56.

奥村武久・川口侃・河原啓・長井勇 (1988). 大

- 学生の過去の「いじめられ体験」に関する調査—神戸商船大学の場合— 神戸大学保健管理センター紀要, **1**, 15–22.
- Olweus, D. (1993) Victimization by peers: Antecedent and long-term outcomes. In Rubin, K. H. & Asendorpf, J.B. (Eds.), *Social withdrawal, inhibition, and shyness in childhood*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. 315-341.
- 佐藤由佳里・盛合智絵 (2007). いじめ体験における忘却について 北海道教育大学教育実践総合センター紀要, **8**, 133–137.
- 清水信介 (1998). 「いじめられ体験」が人格発達に及ぼす阻害的影響について—自己愛性格症例の治療経験から— 札幌学院大学人文学会紀要, **62**, 215–234.
- 高岸幸弘・岩田美優 (2016). 小・中・高校時代のいじめ体験が大学生生活に及ぼす影響 関西国際大学心理臨床研究所紀要, **1**, 77–82.
- 立花正一 (1990). 「いじめられ体験」を契機に発症した精神障害について 精神神経学雑誌, **92**, 321–342.
- 宅 香奈子 (2010). 外傷後成長に関する研究—ストレス体験をきっかけとした青年の変容— 風間書房
- 豊嶋秋彦・石永なお美・遠山宜哉 (1992). “いじめ”への対処と大学生期の適応 (I) —女子学生における過去の「いじめ・いじめられ体験」と自我同一性— 弘前大学保健管理概要, **15**, 19–45.
- 豊嶋秋彦・順毛なお美 (1993). “いじめ”への対処と大学生期の適応 (II) —女子学生における過去の「いじめ・いじめられ体験」と適応感— 弘前大学保健管理概要, **16**, 35–53.
- 山口由加・長野恵子 (2012). 過去のいじめられた体験が青年期の友人関係に及ぼす影響 西九州大学健康福祉学部紀要, **43**, 39–48.
- 横山楓子・内田一成 (2009). 過去のいじめ体験が現在のレジリエンス・自動思考・対処行動に及ぼす影響 上越教育大学心理教育相談研究, **8**, 43–53.
- 吉川延代・今野義孝・会沢信彦 (2013). いじめの被害—加害経験と自尊感情との関係—大学生を対象とした遡及的調査研究—人間科学研究 (文教大学人間科学部), **34**, 169–182.
- 吉川延代・今野義孝・会沢信彦 (2014). 大学生における過去のいじめ経験に関する質問紙調査—いじめ経験といじめの捉え方, および自尊感情との関係—人間科学研究 (文教大学人間科学部), **35**, 155–166.

